

Title	The Conquest of the North Pole, by J. Gordon Hayes, 1934, London
Sub Title	
Author	犬塚, 久雄(Inuzuka, Hisao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.1 (1936. 5) ,p.163- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Conquest of the North Pole, by

J. Gordon Hayes, 1934, London.

「最近北極地方探検史」とも言ふべき本書は、英國に於ける極地地理學の權威デュー・ジー・ヘイス氏に依つて公にせられたものであるが、同氏の既著“Robert Edwin Peary,” “Antarctica,” “The Conquest of the South Pole” 等と共に兩極地方の研究を志す者の見逃がし得ざるものである。

本書は西紀一九〇九年より一九三四年に至る二十五年間に於ける、主要探検隊の行動に就き詳細なる解説を行ひたるものにて、所謂、最近北極地方探検史の名稱を附する所以である。

一九〇九年四月六日、米人ピーリーに依り遂ひに北極點到達の事業完成さるゝに及んで、茲に北極地方探検界に一轉機を見るに至つたのである。即ち、從來の寧ろ冒險を主とする探検旅行に代り、北極圈内全般に亘り、諸種の科學的研究の進歩を見る事になつたのである。爾來、今日に至るまで、英・米・獨・露・瑞・丁等諸國の各地方に派遣せる各種學術調査隊の數は極めて多く、従つてその調査研究に關する報告書類の如きも、關係諸國政府により或ひは探検隊自らの手に依り、世界に發表せられて居るが、それ等の中にて、特に主要なるものを要約し、且つ年次順に配列し、しかも著者自身の權威ある學識は之等の検討を行つて餘す所なく、されば最近北極地方調査探検の情況を知らんとする者には、既に記したる如く最も良き参考書となり得るものである。

尙ほ、巻頭に、「本書をジー・ワトキンスに捧ぐ」とあるは、一九三二年英政府の派遣せる北極地方航空路開拓探検隊の隊長として、僅か二十五歳の青年探検家ジョージ・ワトキンスが、東グリーンランド海岸地方に於ける熱心なる學術調査を遂行中、遂に同地に於いて探検の尊き犠牲となりたるに對して、著者が、その靈に敬意を表したものであらう。事實、本書の中にてワトキンスの探検隊に關する記事は最も詳細を極めて居るのである。

さて、本書は前後二十章に分けられて居るが、此處にその内容を簡単に記せば、「第一章」所謂北極地方の地理學的概説、「第二章」ピーリー以前に於ける北極到達への諸探検隊の活動、並びにピーリー自身の成功に關する經過、「第三章」一九〇六年に於けるデンマーク探検隊の指導者ミリュース・エリックセンが北東グリーンランドに行ひたる探検、「第四章」前章のエリックセンが北東グリーンランドの地に探検の犠牲となりたる後を繼いで、同じデンマーク探検家キャプテン・ミッケルセンが一九〇九一一年に亘りて行ひたる北東グリーンランド地方に於ける探検、「第五章」第十九世紀末に於けるナンセン、ピーリー、近くはラスマッセン、ジエー・ジー・コッホード、ケルヴヨン、ウエゲナー、マーレン、スコット、ワトキンス、ライミル等のグリーンランド氷高原横断に關する経過の詳細なる解説、「第六章」ユーラシア大陸側に於ける北極海方面に關するロシヤ探検隊の活動、特に一九三〇年以後に於ける多くの碎氷船の行動情況、「第七章」一九一〇一一四年に於ける、ロシヤ探検家ガイルキツキのなせるシベリヤ側に於ける北東通路の開拓、並びに、彼のセーウエルナヤ・ゼムリヤ島發見の経過、

及び一九一七年以後數年間に亘る大探検家アムンゼンのシベリヤ沿岸になせる探検、最後に、一九三二年ソヴィエート政府に依りて行はれたる、隊長シニミット教授引率の碎氷船シビリヤコフ號の、歐洲より極東に至る、探検史上空前とも言ふべき、一夏一航海による北東通路征破に關する解説、「第八章」デンマーク人を兩親に持ち、而も自らはグリーンランドの地に生れたるラスムツセンが遂ひにグリーンランド探検に一生を捧げたる事情を、數回に亘る探検旅行の説明に依りて明らかにし、「第九章」北米大陸側北極海群島方面に於ける學術探検に關し、一は一九〇八年以後數年間カナダ政府命令の下に活動せるベルニエ、他は一九一四年以後數年間アメリカ政府命令の下に活動せるマックミランの詳細なる調査報告の検討、「第十章」カナダ政府後援の下に一九一〇—一二〇年の間に數回行はれたる、ステファンソンを隊長とするカナダ北極海沿岸特にマッケンジー河附近の探検、「第十一章」一九一三年、カナダ政府により派遣せられたる、隊長バートレット指揮の探検隊はカルラック號にて北極海群島より北西通路に從ひてベーリング海方面に向ひたるも、堅氷のため遂ひにシベリヤ北東海上に在るウランゲル島附近に冬營を行ひたるも、劇しき氷壓のため船は沈没の厄に遭ひ、非常なる苦難の結果、二年にして無事に救出せられ、而もその間、一行の氷上に於ける各種學術研究に對する態度は極めて熱心なるものありし點を詳細なる記録に依りて説述し、「第十二章」デンマークのグリーンランド探検家として著名なるジョン・ビート・コッホの甥、エル・コッホ博士も亦熱心なるグリーンランド探検家であり、一九一三年以來現在に至るまで、前後七回の同

島探検を行つてゐる。本章にては、一九三一—三四年の間に行はれたる第四回東グリーンランド地質調査に關する經過である、「第十三章」デンマーク人、キャブテン・ビストルップを隊長とする東グリーンランド調査隊は、テディー號にて一九三二年六月より探検を開始したるも、堅氷のため間もなく同號は破壊されたのであるが、その間の一苦心の情況を詳述せるもの、「第十四章」第二十世紀に入つて、一九二一年以前に於けるイギリスは、餘り北極探検に關係しなかつたのであるが、一九二一年に至り、オックラスフオード大學探検隊の組織せらるゝに及んで、北極地方に對する關心は國家的となつたのである。同大學にては、最初は特にスピッツベルゲン諸島方面に調査隊を派遣したるため、ケンブリッヂ大學のグリーンランドに於ると好対照をなし、現在も主として同諸島方面に研究の中心を置いてゐるのである。現在、オックラスフオード大學探検隊の中心人物は嘗て一九二一年第一回探検隊のスピッツベルゲン行きに一學生として參加し、その後、毎回參加し、遂ひに名を成したるビンネイである。彼は、勿論、現在イギリスに於ける極地探検家として重要な位置を占めて居る。「第十五章」ウォルディーを中心とするケンブリッヂ大學の北極探検に關する章である。前章にて記述せる如く、オックスフォードのスピッツベルゲンに對してケンブリッヂのグリーンランドである。ウォルディーは嘗て、一九一四—一六年に於ける彼の有名なるシャツクリトン南極探検隊に一地質學者として參加し、その後も、スピッツベルゲン諸島にも探検旅行を行ひたる經驗家である。一九二三年以後は全力をグリーンランド探検に注ぎ、現在も同島地質調査

には一権威として活動を續けてゐるのである。「第十六章」ジー・アルガーリン、エフ・エト・ウォーズレー兩人を主脳とする、イギリス・スピツベルゲン探検隊に依り一九二四一二五年に於いて、北部及東部スピツベルゲンに行はれたる學術調査に關する記述並びに、一般のスピツベルゲン探検史に就きて略説し、最後に、最近の同諸島が英、米、獨、諾その他諸國に依り毎夏觀光團の旅行地となりたる程一般化せる現状、及び將來に於ける産業的價値の問題に對する著者の地理學上よりする卓見を窺ふことが出来る。

「第十七章」一九一六年ロシヤ人ナグルスキイがフフルマン式水上飛行機にてノヴァヤゼムリヤ島附近を飛行してセドフ探検隊の救援を行ひたることが、北極地方飛行の最初であること、その後に於けるアムンゼン、ミッテルハルツェル等の功績、更に、一九二六年、最初の北極海大横断を決行せるアムンゼン、ノビレのナルグ號、アル・イー・ベード、ウイルキンス等に關する詳細な記述、更に今日の極地探検上、航空機の有する價値に言及し、今日も尙ほ新島の完全なる調査を行ふに當りて最も重要な機關は足と手とであるが、然しながら探検家の眼の役割を演ずる航空機は之れ亦重要缺くべからざることを論じて居る。

「第十八章」時を異にしては居るが、航空機による北極探検の悲劇を二つ取り扱つて居る。

一九二六年、アムンゼンと共にノルグ號にて北極横断を完成したる、オダリー一人ノビレは、再び航空機に依る北極地方學術探検を計畫し、ムッソリニ後援の下に、ノルグ號姉妹飛行船イタリヤ號にて、一九二八年五月スピツベルゲンのキングスハーバー

より一行十五人にて出發したるも、途中暴風のため氷原上の氷塊に衝突、六人の慘死者を出し、救助信號を受けたるロシヤ砕氷船クラッシン號及びマリヤギン號の目覺しき救援作業となり、他の生存者一同無事に救出せられたる事は有名なる話であるが、その蔭に、友の救助に向ひたるアムンゼンが遂に北極海上にて遭難し、非命の最後を遂げたることのありしことを忘れてはならぬ。

更に、一八九七九年八月の間に起りたる悲惨事にて、一九三〇年に至るまで、最後の事情を世人に知られずして經過したるアンドレー探検隊の詳報が記されて居る。軽氣球による探検を計畫したる、スウーデン人アンドレーは、一八九六年第一回北極探検を計畫して成らず、翌年再度決行し、同志ストリンドベルグ、フレンケルの二青年を伴ひ、七月十一日スピツベルゲンを出發したのであるが、以後、全く消息を絶つたのである。

一九三〇年、ノールウェー海豹船プラトヴァーグ號乗組員が、スピツベルゲン東方のホワイト島に上陸、はからずも一キヤンブの殘存物によりて、アンドレー探検隊の遭難地點を三十三年目に發見し得たのである。發見されたる探検隊の日記によれば、一八九八年一〇月一七日を最後の記録となす點より、一年三ヶ月間氷上に苦難の旅行を續けて、遂ひに世に救はれなかつたのではあるが、此のアンドレー一行の極地探検こそ、世界に於ける航空機使用の最初のものなりしことは注意すべき事である。「第十九章」大陸漂移説にて著名なるドイツの物理學者アルフレッド・ウエグナー博士は、又、極地探検に於いても功績多く、しかも遂にグリ

トランプ探検中に、同地に於いて研究の尊き犠牲となりたるものである。本章は、その最後の探検を行ひたる一九三〇年の學術調査に關する詳報を主として居る。一九三〇年五月四日、グリーンランド西海岸グスタフホルムのカマルヂニツクに到着し、それより諸般の準備を整へ、内陸氷横断までに百二十日を要し、東海岸のカンゲルドラクサック氷河地點に冬營所を設置したるは十月のことである。探検隊豫定中の最も重要な高原屯所の建設は七月中旬に着手したのであるが、その地點は東西兩海岸よりの中心點にして、カマルヂュツクの東方二四〇哩の所、九七〇〇呎の高所である。此のグリーランド中央屯所には、一行中のゲオルギ、ソルジイの兩名が留まつたのであるが、その後、石油その他の物資の缺乏を告げたるため、エヌゲナーはカマルヂュツクより救援のため、ローウェ及びエスキモー人ラスムス・ウイルムセンを伴ひ出發したのである。途中、ローウェの凍傷に苦しみたるため、之れをゲオルギ、ソルジイ等と共に中央屯所に留め、エスキモー人及びエヌゲナーの兩人のみカマルヂュツクに向つて戻ることとなつたのである。出發日は一九三〇年一月一日にて、而も隊長ウエガナーの第五〇回誕生日であつた。一方、カマルヂュツクに於ける殘留隊は隊長等の歸還を待ち兼ね、遂ひに搜索隊を組織し、一九三一年四月末、西海岸を出發して東行し、途中、エスキモー人ラスムスに依りて町重に埋葬せられたる隊長の死體を發見するに至つたのである。エヌゲナーは凍死せるものではなく、疲勞の極、テント内にて死亡せるものである。されども、ラスムスの行方は今日に至るも遂ひに知られぬままである。而して、その後に

於ける一行は、勇敢にも探検を續行し、殊に、反響装置に依る内陸氷の厚度測定の如きは最も重要なものである。探検隊は一九三一年一一月無事にコーベンハーゲンに到着した、「第二十章」既に記したる如く、著者が最も敬意を表して居るウトキンスは僅かに二十五歳にして北極地方探検の犠牲となつたのであるが、その最後に關しては、十年前に於ける南極のシャツクルトンの場合同様、英國民の間に相當の衝動を與へたのである。

一九二五年、ケンブリッヂのトリニティ・カレッジに入りたる十八歳の當時より、彼ウトキンスは極地探検に注意を始め、二十歳にして、遂ひに自ら海約船を準備し、スピツベルゲンに行つたのであるが、之れば彼の最初の極地行であつたのである。

一九二八一二九年に亘り、ラブラドルに赴き、内部の寒地帶の調査を計畫せしこともある。

イギリス北極航空路開設探検隊一九三〇年王立地理協會後援のもとに、各方面の學者多數の參加に依りて決行されることになり、總員十四名中、十名まではケンブリッヂ關係であつた。

一九三〇年七月六日、クエスト號はチムズ河を出帆し、七月末グリンーランド東南海岸のセルミリック峽灣に到着し、それより各班に分れ、夫々、根據地を設け、各種の調査を始め、多大の收穫を挙げ、一行は翌一九三一年一一月、本國に歸還したのであるが、その後、ワトキンスは南極地方探検を志して、遂ひに機を得ず、又々グリーンランド探検の決行となり、一九三二年八月九日レヨク峽灣に到着したのである。が、間もなく、八月二〇日、土人船にて唯一人、附近調査中の彼は、遂ひに流氷のため犠牲とな

り、最後の探検は僅かにして中止するに至つたのである。當時の隊員の或る者は、その後もワトキンスの遺志を継ぎ、現在もグリーンランド地方研究を繼續して居るのである。

以上にて、全四十章に亘る本文を終るが、本書中には、尙ほ、極地探検に關する術語の解説及び、一九〇九—三四年に亘り北極地方各地に派遣せられたる探検隊を、ことごとく年代順に網羅し、隊長及探検船の名、探検地點等の解説、更に一八九〇—一九三三年の間に公刊されたる主要探検隊の報告書、著述等に關する解説は本書に收録せる廿數葉の貴重なる極地寫眞及び關係各地の地圖類と共に、一層本書の價値を大ならしむるものがある。(First Published 1934, p.p. 317. Thornton Butterworth, London) 大塚久雄)

寄贈交換圖書雜誌目錄

鐵仁親王日記 附錄	高 松 宮 家	史 學 學 會	國學院雜誌 四二ノ三
東豫史談 二三	西 條 史 論 會	刀劍會誌 四一七	國經濟雜誌 六〇ノ三
金雞學院叢書 一〇〇	金 雞 學 院	東洋文化 一四〇	密敎研究 五八
文化 三ノ三	東北帝大附屬圖書館	東方學報 六	大谷學報 一七ノ一
風俗研究 一九〇	風 俗 研 究 所	刀劍會誌 四一七	歷史地理 六七ノ三
神社協會雜誌 三五ノ三	神 社 協 會	東洋文化 一四〇	歷史教育 一〇ノ一二
人類學雜誌 五一ノ二	東京人類學會	中央刀劍會	青丘學叢 二二
經濟史研究 一五ノ三	日本經濟史研究所	東洋文化學會	仙臺鄉土研究 六ノ二
考古學 七ノ一、二	東京考古學會	日本書誌學會	史潮 六ノ一
考古學雜誌 二六ノ一、三	考 古 學 會	東方文化學院京都研究所	史苑 一〇